Chukyo University

チンギス・ハーンとオリエンタリズム

――日本人がチンギス・ハーンを物語る意味――

鈴　木　道　子

はじめに

1　研究経緯

私は2005年1月，中部高等学術研究所（中部大学）の共同研究会「アジアにおける文化クラスターⅢ―時代認識の変容―」において，「蘇るチンギス汗―Who's Whom―」と題して口頭発表し，その速記録も出されている[*1]。当稿はこの研究会報告を継承するものである。先のタイトル中の「Who's Whom」は，この場合「誰のためのチンギス汗か」というほどの意味であり，また，英雄伝承全般に敷衍されうる表現であるという意識もあった。一言で言えば，チンギス汗（1162？～1227）の没後，どのようなかたちで，誰によって，何のためにその名が称揚されてきたかを明らかにしようとしたのである。

源義経が蝦夷から大陸へ渡り，チンギス汗になったという巷説を皮切りに[*2]，満州での関東軍によるチンギス汗の陵墓建設，ソ連崩壊後のモンゴル国と中国それぞれにおけるチンギス汗を称える記念行事の政治的背景を[*3]，先の共同研究会では概括した。義経伝説そのものを研究対象にしているわけではないが[*4]，北海道に少なからず残存する義経説話と関連遺跡は，義経＝アイヌの英雄オキクルミ説を好例として[*5]，江戸末期のアイヌ

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

懐柔策に始まり北海道開拓団への追い風効果など，当時の蝦夷地への進出の国情を象徴するものといえる。チンギス汗へかけた関東軍の思惑と相通じる点を注目したい。満州でのチンギス汗陵墓建設は，それでもって現地の人々の歓心を買おうとした軍の策であり，2002年のチンギス汗生誕840年記念行事では，モンゴルと中国それぞれの政府が同様の求心力という効果を狙っていたことは明らかであろう。

モンゴル，チベット，キルギス族，それぞれの英雄叙事詩「ジャンガル」「ケサル」「マナス」を，中国の三大叙事詩と中国政府が認定[*6]するのも，多元一体を標榜する中国にとっての「三大」である。英雄や偉人を語る言説には，誰が，誰のために（誰にとっての）英雄なり偉人であるのかを，問いかけながら接する必要がある。

2　日本人とチンギス・ハーン

1940年，満州国が盛時を誇っていた頃，尾崎士郎は新潮社の求めに応じ，三度に及ぶ従軍前線記者体験と創作のための情報収集旅行をふまえて，『成吉思汗』を書き下ろし，それは直ちに出版された。おそらく，日本人による小説「チンギス汗」の嚆矢ではなかろうか。

尾崎士郎はその翌年，大政翼賛会の第１回中央協力会議において，文化面での協力会議員の一人に推薦されている。満州映画協会が『成吉思汗』の映画化を申し込んでいたようだが，結果は未確認である。しかし国内では今日出海の脚色で前進座が大阪と東京で上演[*7]した。尾崎自身は創作活動を振り返った『小説四十六年』にその作品自体の趣旨を特に述べてはいない。しかし新潮社の依頼は，満州国が存在しなければ無かったのではないだろうか。これについては，本稿の「おわりに」で満州国での文化活動について触れるので，参照されたい。＜蒙古の英雄チンギス汗＞への志向は，今や同じ大陸の地を共有していると言う共感が当時の作家の潜在意識にあったとしても不思議ではない。あるいは，これまでの事例を敷衍すれば，文学による国策の一環と捉えることもできよう。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

新潮社や尾崎の意図は不明だが，戦後，チンギス汗を扱った小説類の多さには，単に日本人はチンギス汗が好きだ，あこがれる，では済まされないものがある。幾度かの映画化，今も書店で一コーナーを占めるほどの人気。こうした現象は何を意味し，どのような結果をもたらしているのか，看過できない。モンゴルをフィールドとする文化人類学者小長谷有紀氏は，こうした一連のチンギス汗に対する「理解」を，「日本人好みに作りかえられて信じられてきた」，もはや「日本的神話」と言ってもよいとしている。[小長谷 2007：7]

以上のような従来の傾向とは違った作品も，近年では登場してきてはいるが，本稿では，尾崎士郎の『成吉思汗』も含め，チンギス汗を主人公とした主要な作品において，特に日本的解釈が加えられていると思われる幾つかの文脈の描かれ方を比較した上で，その思想的背景と問題点を考えてみたい。尚，本稿で私が念頭に置いているのは次の５作品である。関連として，ミステリーの１作品と，２本の映画に言及することになる。

尾崎士郎『成吉思汗』新潮社 1940（昭和 15. 7）

井上　靖『蒼き狼』文藝春秋 1960（昭和 35）

森村誠一『地果て海尽きるまで　小説チンギス汗』角川春樹事務所 2000（1998～1999 学芸通信社配信の各地新聞紙上）

津村　陽『草原の覇王チンギス・ハーン』PHP 2006（2005～2006 Voice 紙上）

堺屋太一『世界を創った男チンギス・ハン』日本経済新聞 2007（2006. 2～6 日本経済新聞朝刊紙上）

高木彬光『成吉思汗の秘密』光文社（高木彬光コレクション/長編推理小説）2005

映画「蒼き狼　成吉思汗の生涯」国際放映（中国・日中文化交流会協力[*8]）1980,（DVD290min.，監督　森崎東・原田隆司），原作：井上靖『蒼き狼』

映画「蒼き狼　地果て海尽きるまで」角川春樹 2007,（140min.，監

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

督　澤井信一郎)[*9]，原作：森村誠一『地果て海尽きるまで　小説チンギス汗』

3　表記について

本稿では，チンギス／ジンギス，ハーン／ハン／汗／カーン／カン／合罕，ヂ／ジ（例えば，ヂョチ／ジュチ）等の表記が一定していない。これは，原則として，そこで引用しようとする著書の表記に合わせているからである。なお，カンとカーン違いについては，『秘史』の訳註で「＜王，首長＞を意味するカン『罕』に対し，『合罕（カハン）』はチンギス一族出自の＜王＞にのみ冠せられた一種の称号である」［小澤 1997：48］とされている。

Ⅰ　チンギス・ハーンに関する資料について

1 『元朝秘史』

チンギスの唯一の正伝とされる『元朝秘史』（モンゴル語原本は「モンゴルの秘密の歴史」）に関して，日本でも数多の研究が成されてきており，成立年代や経緯については未だに未解決部分を残しているようだが，ここでは私が捉えている一応のアウトラインを示しておきたい。

正集10巻，続集2巻から成る『元朝秘史』（以下『秘史』と略称）は，今は失われてしまっているモンゴル語原本が，明代になって漢字音訳・転写され，側に直訳を示し，節（全282節）毎に大意が口語訳され，『元朝秘史』と題されたものである。「モンゴルの民族が生んだ最古の，そして最大の歴史文学的作品」［村上 1971：Ⅲ-381］とも，「英雄叙事詩の要素が強い」［小林 1960：補足3］とも評されているが，チンギスを語る上での根本資料であることには変わりない。「（多くの研究者が位置づけているような）単純な『歴史年代記』ではない。それは，テムヂン／チンギス合（カ）罕（ハン）の一生を，チンギス合罕一族の人々に伝え残すべく書かれた『チンギス合罕伝』あるいは『チンギス合罕一代記』とも称すべき書きもの」［小澤

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

1997：下 314］とする小澤の「私見」を私は特に重視したいと思う。

次に示すのは，これまでに出された『秘史』の日本語訳と，日本語訳を交えた『秘史』の概説の主要なものである。「チンギス・ハーン」を作品化した大方の著者たちが，その参考資料として挙げているものでもある。

那珂通世譯注『成吉思汗實録』筑摩書房 1943（1907 明治 40）。

小林高四郎譯註『蒙古の秘史』生活社 1941

村上正二訳注『モンゴル秘史（全 3 巻）』平凡社（東洋文庫）1970・72・76

小澤重男訳『元朝秘史（全 2 冊）』岩波書店（文庫）1997

小林高四郎『ジンギスカン』岩波書店（新書）1960

岩村忍『元朝秘史』中央公論社（新書）1963

小澤重男『元朝秘史』岩波書店（新書）1994（訳書に先立って出された解説書）

岡田英弘『チンギス・ハーン』朝日新聞社（文庫）1994（モンゴル通史でもある）

2　その他の史資料

「はじめに」で挙げた作家達が『秘史』以外で参考にした文献として明記し，あるいは想定される史資料の主要なものを，一部，小林の解説［小林 1960：付録 3］を借りて示しておく。

『元史』（の巻一「太祖本紀」）　明初の勅撰による。元朝歴代の漢文の実録によって編纂された。『秘史』は利用されていないが，不可欠の史料。

『皇元聖武親征録』　1260～1285 に編纂されたと考えられる漢文史料。ハーンの征服戦争が実録されている。

『集史』　イル・ハン国で宰相を務めた史家，ラシードゥッディーン（1247-1318）が勅命で 1303 年に完成させた。原典はペルシア語で書かれた『ジャーミー・アッタワーリーフ（集史）』。通常，ロシア語訳が利用されている。全 3 巻中，第一巻が原始からガザン・ハーンに至るモンゴル史。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

『秘史』の記録との対比でしばしば言及され，『聖武親征録』と酷似した部分が多いとも言われている。

3　史資料と創作

明治40年の那珂通世による『成吉思汗實録』を初めとして，言語的・民族文化的解釈と注釈を併せ，いずれも高く評価された日本語訳は，時代を追う毎に積み重ねられてきた。こうしたチンギス・ハーン研究に恵まれ，そこから作家達が素材として，テーマとして大いに刺激を受けたであろうことは想像できる。『秘史』の記述の間隙を補整修正する参考史資料にも事欠かない。以上のことから，次の事を確認しておきたい。つまり，ミステリーは別として，先に示した「チンギス・ハーン」作品群は，著者達がなべて「歴史小説」と銘打っているのであるから，上記のような複数の史料から，各々異なる筋の展開を導き出してきても，それは当然あり得ることとして了解できるのである。尚，高木彬光のミステリー『成吉思汗の秘密』は，江戸時代に出された偽書や珍説［宮脇2002：217］をフル活用したもので，日本人とチンギス・ハーンの関わりを示す興味深い事例となっている。

しかし，いずれの史資料にも記されていないことがある。『秘史』には情感こめて綿々と言葉を重ねる場面や，訳者も賞賛する名調子の韻文も多々あるが，心理や動機が明かされていない部分も多い。そこを描写するのが創作家達のいわば使命であるが，それは日本人作者の想像であり認識であって，モンゴル人が抱く意識でも，ましてや「歴史」[*10]でもないことは明白である。日本の作家達が一様に抱く「チンギス・ハーン」創作へのモーティベーションは，なぜ彼一代でかくも壮大な偉業が成し遂げ得られたのか，何がそれを可能にしたのかと言うことであった。それは映画であっても同様であろう。この「何」を，彼らがどのように捉えたかを，次節で詳細に見ていきたい。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

Ⅱ　小説「チンギス・ハーン」の狙い

1　制覇の動機解明とサブプロットの有無

先に挙げた，本論が扱う５つの文学作品のプロット（筋の展開）と細部表現における濃密度を検討してみると，その創作意図は二つのタイプに大別することが出来る。大別の妥当性をここで論じることまではできないが，本論の主眼は別の所にあることを断っておきたい。

まず，昭和15年に書かれた尾崎士郎の『成吉思汗』は中編小説であり，大陸の英雄を紹介すると言うほどの意図であったと思われる。『秘史』におおむね忠実に展開し，いわばモンゴルの一つの族性[*11]とも言える（人）妻の掠奪やその後の出産については，比較的ストレートな受け止め方を示している。次に，井上靖の『蒼き狼』（1960）と森村誠一の『地果て海尽きるまで　小説チンギス汗』（2000に単行本化）は，40年の時を隔てて一つの共通点をもち，これを一つのタイプとみなしたい。近年の作である津本陽『草原の覇王チンギス・ハーン』（2006）と堺屋太一『世界を創った男チンギス・ハン』（2007～単行本化）は，もう一つのタイプである。この二つのタイプを分ける決め手は，サブプロット（ダブルプロット）の有無であり，井上と森村はダブルプロットの構造をもつ。

言うまでもなくメインプロットは，チンギス・ハーンがモンゴル帝国を築くまでのプロセスである。幼名テムヂンが，伯父達をはじめとする部族連合の長として推挙されてチンギス・ハーンを名乗り，ついには全モンゴル部族のハーンとなる。後の元王朝にまで発展する礎を築いた，60有余年にわたる休むことなき制覇の道程である。津本と堺屋はこのメインプロットにおいて，いかに事が運ばれたか，どのような進取の戦術とシステムが功を奏したのかと言う点に重点を置いたと言える。津本の場合は，異民族・異教徒（ムスリム）の割拠する中央アジアでの人心平定の方策にモンゴル軍の勝因を見出そうとする姿勢が顕著であり，且つ「敵の撃破と掠奪」こ

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

そ「最高の快楽」とチンギス・ハーンに言わしめ「遊牧民の首長」としての性格を印象づけている［津本 2006：392］。

片や堺屋の場合は，更に明快なスタンスを示した。すなわち，「人間（じんかん）に差別なし，地上に境界なし」のグローバル社会[*12]の創造が，チンギス・ハーンの征服目的ではなかったかという仮説を立てた［堺屋 2007：Ⅰ-243］。そのための経済活動に関する記述が，全編を通して堺屋らしい独創と生彩を放っているのである。

2　サブプロット（ダブルプロット）

文学用語としてのサブプロット（副筋）は多くの場合，「メインプロットと同質で，その一変奏として設定されており，結果的に劇の主題はそれによって強化・統合される」［川口/岡本 1998：111］。いわば二重写しによる増幅効果が期待されるのであるが，本論で対象の中心とする井上靖・森村誠一の場合は，それとは多少異なる。

メインプロットとサブプロットがいわばコインの表裏の関係にあり，裏には全く違った図柄が描かれているのだ。メインプロットの＜動＞に対するその水面下の意識の動きと捉えることも可能だが，要するにそこでは，モンゴル族の祖である狼の末裔としての自己アイデンティティ達成のプロットが，チンギス・ハーンとその変奏としての長子ジュチの物語の，ダブルプロットを成す関係で進行してゆくのである。つまり，入れ子になった二重のダブルプロットの構造と見ることもできる。

チンギス・ハーンもその長子ジュチも，生母が掠奪された後に生まれた。チンギス・ハーンの母ホエルンは，メルキト族の長の花嫁であったところを掠奪されてきた，その第一子である。チンギスの新妻ボルテは，メルキトの報復を受け一旦掠奪されたが，奪還されて出産した。ジュチ（「客人」）と命名されたが，厳密には両人共に父親不明の可能性を秘めている。

その認識を強く作品中に取り込み，井上と森村はメインプロットを支える秘められた，そして最大のモーティベーションとして捉えたのである。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

疑惑がより濃厚なジュチは，敵のメルキトではなくモンゴルの末裔であることを自らの功績で証明することが，父チンギスによって終生求められ，チンギスはそれを確認することで自身の証明にも繋がるとみる，そうした父子二代にわたる出生に関わる心理模様のダブルプロットを，井上・森村は設定したのだった。

3　二つの錯誤と創作のスタンス

しかし，そこには二つの重大な錯誤がみられる。一つは，大帝国を築いたモンゴル遊牧民の覇者チンギス・ハーンの，その偉業のモーティベーションを，自らの父親が誰であるかという自己アイデンティティの達成に，敢えて言うならば安易に西欧の心理分析的見解を結びつけ，後で述べるように日本的な文学テーマである「出生の秘密」に執着したこと。もう一つは，チンギス・ハーンは系譜を辿ると，（蒼い/灰色）狼というモンゴルの伝説上の族祖には直接には繋がらず，その系譜とは別の感光受胎に拠る祖を出自とするにもかかわらず，その点が軽視されているということだ。

伝承の中で主人公の父親が不明であるのは，ひとりチンギス・ハーンやジュチだけではない。光や神などによる異常受胎や父親の存在がミステリアスであることなどは，神話や伝説では英雄に普遍的な一要素[*13]であって，作家達が拠り所とする『秘史』が小澤が述べるように，後の一族に伝えようとする「チンギス・合罕（カハン）一代記」［小澤 1997：下 315］である性格を示している証左とも考えられるのである。

井上は初版単行本の「あとがき」で，「『蒼き狼』は，私の歴史小説としましては，短編は別として，『天平の甍』『楼蘭』『敦煌』に続く第四作であることを附記しておきます。」と自作の分類上のスタンスを明言している［井上 1960：327］。しかし，大岡昇平との有名な「『蒼き狼』論争」（後述）を経た後に出た『井上靖小説全集』では，「自作解題」の中に，『蒼き狼』について次のような言葉がみられる。「書こうとしているものは歴史ではなく，歴史上の人物や事件に，物語としての主題を背負わせてい

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

る。」「・・・歴史的事件はできるだけ正確を期してはいるが，スポットライトが当てられているのは舞台でもなければ，背景でもない。そこで展開されているドラマである。成吉思汗を主人公としているモンゴル民族生々発展のドラマである。」［井上 1973：460］

森村がその書題「地果て海尽きるまで」に添えた「小説チンギス汗」が明示するように，これらの作品は「小説」であり，井上の言う「物語」であり，いかなる創作の手が加わろうともとやかく言うべきではないという見解は当然あり得る。しかし，こうした作品を原作として映画化され，より広範に影響力が及ぶとすれば再考の余地が生まれよう。井上により「モンゴル民族生々発展のドラマ」を描いたという他民族の根幹に関わる創作意図が明言されており，2007 年の映画化（原作者は森村誠一となっているが，後に示すように作品傾向は井上の流れをくむものであり，映像にも，井上靖の協力が明示されている）が，モンゴル国内において批判の目に晒されているという現実[*14]を知るとき，看過できないものを感じざるを得ない。

しかし，批判の対象を取り上げて問題視する前に，題材となりストーリーを提供している原典『元朝秘史/モンゴル秘史』のどの部分（素材）が，どのように物語化[*15]されているかを，具体的に明らかにする必要もあろう。『秘史』も記述された物語であることには違いない。しかし，原作はモンゴル人の手になることは大きな違いである。日本人による物語化の特性と，かくも度重ねられてきた背景を本論で考えてみたい。

Ⅲ　いかに物語化されたか

1 「蒼き狼」幻想

対象を先のⅡ－3で挙げた二つの錯誤に限定し，考察の都合上，二つ目の＜系譜の問題＞を先に取り上げたい。井上靖の小説以来，「蒼き狼」はチンギス・ハーンの代名詞として定着してしまった感がするが，『秘史』

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

では冒頭に一度だけ登場する。（以下の訳文引用はすべて［小澤 1997］による。漢数字は巻，算用数字は節を示す。）

一/1　チンギス合罕（カハン）の根源は，神なる天神よりの運命（さだめ）を以って生まれた蒼い狼（ボルテ・チノ）であった。その妻は淡紅色（うすべにいろ）の雌鹿であった。

「蒼」の文字は『秘史』すなわちモンゴル語原典の漢訳において用いられており，日本語訳もすべてそれを踏襲している。従って「蒼き」は井上の創意ではないが，「モンゴル語ボルテは＜蒼い＞の意とは，いくぶん異なり，＜白っぽい地に交じった暗灰色の斑の意＞」だと小澤の訳註にある。森村は作品中で「灰（色）の狼」としている。ボルテ・チノは単なる固有名詞だった可能性もある。

ボルテ・チノを系譜の初代として，第12代ドブン・メルゲンは妻アラン・ゴアとの間に2人の子を遺して他界。その後，アラン・ゴアは「夜ごとに，白黄色の人，家の天窓，戸口の上窓の明るみの光にのりて入り」（一/21）来たる光の精をうけて，末子で第13代となるボドンチャルとモンカクの他2人の男子を得た。しかし，母親のアラン・ゴアが亡くなると末子のボドンチャルは，「愚弱なり」と言われ親族にも数えられず，「背中に鞍傷のある，禿（ち）びた尾をした」馬に乗り，家を離れて独り暮らしを始める（一/23・24）。後に，チンギス・ハーンのボルヂギン氏族の祖となるのだが，この幼少年期に体裁がみすぼらしいというエピソードも英雄伝説における物語としての典型と言えよう[*16]。

第一章第一節に示された「蒼い狼（ボルテ・チノ）」に係る一文は，井上の『蒼き狼』，森村の『小説チンギス汗』の中で，それぞれ次のように物語化されている。

■『蒼き狼』［井上 1960：6，11，14-16］

「母親さえその父親をはっきりと知らぬ一人の嬰児は，鉄木真（テムジン）と名付けられ，モンゴル部族の一人の頭領の長子として張幕の中に生い育つ運命を与えられ」，7歳になったとき初めて部族の祖先の話やその伝承を，古老の口から大人達に交じって耳にした。

「鉄木真も，この蒼き狼の話から大きい感動を受けた。鉄木真は自分が

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

狼と牝鹿の子孫であるということに満足であり，そうでない他部族のことを思うと，そうした他部族の者が哀れにも卑しくも思われた。」

「自分たちボルジギン氏族の者が他のモンゴル人より天の光のために優れているということは，勿論鉄木真にとっても嬉しくないことではなかったが，併し，全モンゴル人の血の中に等しく頒け与えられている狼と牝鹿の血の方が，鉄木真にはずっと素晴らしいことのように感じられた。」

このようにして鉄木真の自信と誇りの根源となる狼の血が，異母弟によって父の実子でないという理由で否定されてからは，狼の血を結果から逆に証明することに人生を賭けるようになる。その伏線が以上の幼年期の鉄木真の思考の中に敷かれたとみることができよう。感光受胎の神話は埒外におかれたのである。

次に森村の場合を見てみよう。

■『小説チンギス汗』[森村 2005：上 22-23，108]

ホエルンはイェスゲイに掠奪されて，1年ほど後に，イェスゲイのゲルの中で一人の男子を産んだ。「イェスゲイは嬰児の凡庸ならざる骨相を見て取り，『この子は我らが始祖ケンテイ山の灰色の狼（ボルテ・チノ）の生まれ変わりに違いない。将来はモンゴル族を統率する偉大な指導者となるであろう』と大いに喜んだ。モンゴル族にはその始祖は灰色の狼（チノ）と，その妻は白き牝鹿（マラル）であるという伝説があった。ちょうどホエルンが出産したとき，イェスゲイはタタールの攻撃に勝利して，凱旋して来た。その戦さでテムジン・ウゲという名前のタタールの指導者を討ったので，イェスゲイは初めての息子を鉄木真と命名した。」

幼年期青年期を通じて，鉄木真自身が「灰色の狼」を意識したという記述は見られない。光受胎（感生説）の神話にいたっては，次のような簡単な言及が成されているに過ぎない。鉄木真と按達（アンダ）（盟友）を誓い合ったジャムカの出自を説明した箇所である。ジャムカは後に鉄木真の，そしてチンギス・ハーンの仇敵となる。

「ジャムカは光とアラン・ゴアが結婚して生まれた，遠祖ボドンチャル

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

をテムジンと共通にしている。テムジンはモンゴル本流に属し，ジャムカは支流であるウリヤンハイ族ジャダラン氏に属し，ジャムカの父は故イェスゲイに服属していた。」

もう少し正確に記すならば，ボドンチャルが最初に側女としたウリヤンハイ族の女の前夫との間の子の系列にジャムカは属する。厳密には「支流」とも言いがたいが，感光受胎した女（アラン・ゴア）を中継ぎとして「狼」の本流に繋がるチンギス・ハーンは，正に「支流」に他ならない。繰り返すことになるが，「狼」の血統は幻想なのである。

2 「実父」への幻想

森村誠一『小説チンギス汗』では，既に見たところでは，「灰色の狼」にはさして関心が注がれていないようなのだが，敵のメルキト族から奪還してきた妻ボルテが出産したという理由で，長子のジュチはメルキトの子と噂され，後継者たることを否定された頃になって，チンギス・ハーンに，自身をかえりみて「狼」への執着が表出してくる。

本論のキーワードともなる＜「狼」への執着あるいは固執＞を考察する前に，まず原典の『秘史』では，この「実父」はどのように記述され，日本の作家達がどのように物語化したかを次に見てゆきたい。問題の対象となるのはチンギス・ハーンと長子ヂョチの「実父」である。

■『秘史』[小澤 1997：33-36，37，103-4，下 134-5，173-8]

ハーンについては，巻一の 54 節から 56 節にかけて，父イェスゲイ・バアトゥルが，メルキト族のイェケ・チレドが「オルクヌウド人衆から娘を娶り出立して来るのに遭って」，その娘，後のホエルン夫人を掠奪して家に連れ帰った事情や状況が記されている。59 節で，「イェスゲイ・バアトゥルがタタル族のテムヂン・ウゲ，コリ・ブカを襲撃してもどり来ると，そこに，ホエルン夫人は妊娠しており，（中略）まさにここでチンギス合罕が生まれた。生まれる時，己が右手に，髀石（シアー）ほどの血塊を握って生まれた。」そこでテムヂンと命名されたことは既に述べた。極めてニュートラルな記

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

述であり，「実父」に関する詮議の形跡は微塵も無いと言えよう。

テムヂンの妻ボルテは，かつてホエルンを奪われたメルキト族の報復を受け，収奪される。時を経て奪還された時の模様が巻三の 110 節にある。テムヂン，ヂャムカ，トオリル罕などの軍兵がメルキトを襲い，逃走する人衆の中で，テムヂンが「ボルテ，ボルテ　とさけんで行くのに遭って，（中略）ボルテはテムヂンの声を聞きそれと識って車から降りて，走り来て，（中略）ひしと抱き合った。*17」この次の 111 節で，ボルテがメルキトの陣内では，新妻ホエルンを奪い取られたチレドの弟チルゲルに，「かかわらせ」られていたことが明かされる。併し，その後の出産については全く触れられていない。

「（長子）ヂョチ」が初めて登場するのは，巻五の 65 節で，チンギスがヂョチの嫁として，亡父の盟友トオリル合罕の娘を求めようとしたときである。その後，巻十の 239 節においてヂョチの軍功が縷々示される。オイラド，ブリヤド，キルギスなどシビル（シベリア）の諸族を降伏・帰属せしめ，「チンギス合罕は，ヂョチを嘉みして言うのに／わが子達の長兄（あに），汝は包（パオ）より初めて出でて，（中略）吉祥ある『森の人衆』を服（まつろ）わしめ来たれり　汝。その人衆を汝に与えん。」

ヂョチの実父に関する疑念が明示されるのは一カ所である。続集の巻一，つまり巻十一の 254 節から 255 節にわたり，ハーンの後継者を指定する場面で，ヂョチと次男チャアダイが大喧嘩をするに至った原因としてである。ハーンが「我が子達の兄はヂョチなるぞ。何と言う」とヂョチに意見を求めると，すかさずチャアダイが言う。「『ヂョチが申せ』と云うは，ヂョチに委ねるを言うや。このメルキトの紛れもない申し子に如何に統べしむるや　我等」。二人が掴み合いをしている間，「チンギス合罕は声なく座っている。」余人の取りなしなどあって後，チンギスは「長はヂョチにあらずや，この後，かかる言を言うなかれ」と勅した，とある。後継者は三男のオゴディとなった。

以上が，『秘史』において，チンギス・ハーンと長子ヂョチの「実父」

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

に多少とも関わると思われる記述の，主要なものの全てである。これだけが所与のシークエンス（筋書き）であり，この素材から作家たちの物語は創作されたと考えられる。具体的な描写を見てみよう。

■『蒼き狼』［井上 1960：35，41，91，92-3］

鉄木真が初めて自分の出生疑惑を知らされるのは異母弟ベクテルの言葉を通してである。父エスガイが殺害され，親族にうち捨てられた鉄木真母子一家は結束が必要なのに，異母弟達に乱されがちだった。鉄木真がベクテルをなじる。

「お前は母ホエルンの子ではないのだ。優しいホエルンをこれ以上悲しませる権利がどこにあるのか」鉄木真が言うと，ベクテルはそれに対し，「お前こそ，父エスガイの子ではない。俺もベルグタイも，カサルも，カチグンも，テムルンもエスガイの子だが，お前だけは違う。俺は知っているのだ。部落の誰もが知っていた。知らないのは当のお前だけだ。（後略）」このできごとが，家族の統率者としての鉄木真がベクテルを射殺する理由の一つとなった。

しかし真相を知らないのは鉄木真だけではない。「ホエルンは鉄木真が二人の男の孰れの子であるか判らなかった。成人したら，どちらかに似ていることで，それは判明する筈であったが，（中略）現在に至るも二人の男の孰れにも似た兆候を示さなかった（後略）」。このあと，ホエルンが二人の男と鉄木真を具体的に比較する様を綿々と記している。

次にジュチの出生についてはどうか。『秘史』ではボルテが敵メルキトから奪還され，テムヂンと再会を果たした時点まで書かれていて，ジュチの出産に関しては何らの記述もない。いきなり妻を迎える年代になるが，井上靖は次のような物語にしている。

「・・・鉄木真にはまだ一つのことが心の中で決まっていなかった。それはボルテをどうするかということであった。ボルテには彼女を捜し当てた時，一目会っただけであった。（中略）鉄木真の眼は決して見誤らなかった筈である。ボルテは妊っていたに違いなかった。」

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

ボルテと再会するのは出産後である。あなたの子供だから，名前を付けて下さい，と言うボルテに，「俺の子かどうか判らぬ」と突っぱねる鉄木真。「貴方の子供でないという証しはどこにもないではないか。私も知らない。貴方も知らない。」という声が聞こえ，鉄木真は混乱したまま，整理もできないままに「ジュチ」と応える。“客人”と言う意味であった。この自らの行為に対する鉄木真の畳々とした自問自答が続き，それが井上作品の一つのトーンを形成しているのだが，これに関しては次の項で述べよう。

■『小説チンギス汗』［森村 2005：44，52，123］

チンギス汗は新生児の時に「灰色狼ボルテ・チノの生まれ変わり」と父イェスゲイに認知されたことは既に述べた。しかし，イェスゲイ亡き後，テムジンが父の後を嗣ぐことは，「モンゴル部族の汗にメルキトの子を戴くわけにはいかない」と言う理由で他の部族の衆が強く反対した。異母弟も「メルキトの指図は受けない」と言って鉄木真に反抗的だ。

しかし，森村は「ホエルンが掠奪されてから約一年半後にテムジンが生まれたのであるから，いわれもない言いがかりである」としている。この風評は，後にチンギス汗が自己証明に固執する，換言すれば，飽くなき征服欲の追求という筋書きへの伏線であると考えられる。メルキトから奪還されて間もないボルテ夫人の出産を，何も言わずに受け入れ，「ジュチ」と命名することにも繋がる。ジュチの場合は，「出産日から逆算して，メルキトの子である疑いが濃い」とされているのである。

3　自己証明の呪縛

宿命的とも言える，親子二代にわたる新妻の掠奪と報復の繰り返しが，井上・森村作品のストーリーとしてのコアの一つとなっていて，それに伴う二人の男の出生疑惑が，物語の要となっていることは明らかである。

テムジンの妻ボルテが掠奪された事件は『秘史』をおいて他の史料には記録が無く［村上 1971：193］，また『集史』には全く違った形の記録が

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

載っているのだが（*17 参照），歴史的事件が史実かどうかという点は，作家達がこだわる必要のない領域であり，筆者も問題にするつもりはない。検討すべきと考えられるのは次の点である。

モンゴル人の名前としては決して珍しいものではない「ジョチ/ヂョチ/ジュチ」とその語義としての「客・仲介者・通辞」が，きわめて日本的に「よそ者」（森村の場合）と言う解釈まで生じたこと，井上に端を発すると思われる「蒼き狼」への憧憬とも幻想とも言える執着（これによって，神的な光による感生受胎という神話的要素がかき消されてしまった)。そして，この二点が結びついて，モンゴル族の「客人」「よそ者」であることからの決別を，モンゴルの根源たる「狼」であることを自己証明することで果たす，という新たな日本のチンギス・ハーン物語が創作されたことである。具体的に，物語のその主張場面を見てみよう。

■『蒼い狼』［井上 1960：93，319-20，321］

「長い生涯，彼は妻ボルテの生んだ嬰児を館の客人として遇しようと決心したのである。（中略）自分がモンゴルの血を持っているかどうかの問題に苦しんだように，将来この嬰児もまた同じ苦しみを持つ運命を担っていた。そして自分自身が狼になることに拠って，己が躰のモンゴルの血を立証しなければならぬように，ジュチも亦同じように狼にならなければならぬ（少なくともそれを志向しなければならぬ）運命を背負っているのであった。『俺は狼になるだろう。お前も狼になれ』」。

明らかに父から疎まれているように思えたジュチは，常に困難な任務を自らに課し，遠くキプチャクの草原制覇に遠征し，客死した。その知らせが届いたときである。

「成吉思汗は今こそ知ったのである。自分が誰よりもジュチを愛していたことを。自分と同じように掠奪された母の胎内に生を享け，自分と同じように，自分がモンゴルの蒼き狼の裔たることを身を以て証明しなければ成らなかった運命を持った若者を，成吉思汗は他の誰よりも愛していたのであった。」

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

成吉思汗はジュチの死による悲嘆から自らを取り戻すと，直ちに西夏攻略を決定した。

「西夏を撃ち，金を撃つその戦塵の中に，成吉思汗は己が残された生涯を埋めようと思ったのである。モンゴルの蒼き狼の裔たることを，彼は自らまだ立証し終えてはいなかった。ジュチの如く，（中略）その生涯を，自分もまた戦闘の中に埋めなければならなかった。そうすることに於いて成吉思汗は自らを蒼き狼そのものにしなければならなかった。」

■『小説チンギス汗』［森村 2005：下 87，128-9，132］

井上の『蒼き狼』から 40 年の時を経て書かれた森村誠一の作品は，先に述べたストーリーとしてのコアや物語の要において，きわめて井上のものに類似している[*18]。衆目に晒されたジュチの動静は，逐次成吉思汗自身の宿命に重ね合わされる。「成吉思汗自身が異端の子であるように，異端の父子は相反発しながら強い絆で結ばれていた。」

従って，「ジュチの体内に流れるメルキトの血に対して」一旦疑念が生じれば，成吉思汗自身に向けられる。重ねての命令にも拘わらずキプチャク遠征から戻らないジュチ軍に対し謀反の意図をみた成吉思汗は，ジュチ征伐を決定。軍の出陣を命じる。

息子の命乞いをするボルテに対し，「ジュチは我らの息である前に，モンゴルの灰の狼であり，モンゴルの将である」と拒絶。「生涯，モンゴルの客人としての疑惑を雪ぐために，一生をモンゴルに捧げるべく運命づけられていた。ジュチはその運命に背いた。（中略）ジュチに対する怒りは，自分自身の中に流れているかも知れぬメルキトの血脈に対する怒りであった。」

しかし，ジュチは帰国しない代わりに，遺骨となって戻ってきた。

「いまにして，成吉思汗はジュチが父親の負荷までも担っていてくれたことを悟った。」

「ジュチが死をもってメルキトの血脈の疑惑を払拭し，灰の狼の後裔であることを証明したと思った。そしてジュチによって，成吉思汗が自らに

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

抱いていた疑いも雪がれたのを悟った。」

□尾崎士郎『成吉思汗』[尾崎 1940：343-6，391-2]

□津本陽『草原の覇者チンギス・ハーン』[津本 2006：76，267-9]

□堺屋太一『堺屋 2007：281，212-3』

これら三作品が，それぞれチンギス・ハーンとジュチの出生についてどのように扱っているかについてのみ，簡単に触れておきたい。

尾崎の場合，12 章構成で，『秘史』のホエルンの掠奪から始まる筋書きと内容をほぼ踏襲しているが，奪還されたテムジンの妻ブルテの出産については，かなりの紙幅を使って物語化している。「明らかに自分の子でないと分っている」としながらも，「処分しますか」と言う部族の者の声ははねつけ，「ジュチ」と命名。成吉思汗の後継者指名争議では，弟チャガタイが兄ジュチを拒否して取っ組み合いの喧嘩となるが，最後にはチャガタイがひれ伏して兄に詫びる。この部分はチンギス・ハーンをめぐる全作品中でも，異色の創作となっている。

津本の場合，奪還されたテムジンの妻（ビュルテ）の出産に関しては，これも異色といえるが，疑惑を明瞭に否定する表現をしている。「テムジンはビュルテを奪われてから五ヶ月しか経っていないのでわが子であると分かっていたが，ジュチ『客人』と命名した。」それでも，後継者指名では，チャガタイとこれまで見てきたのと同様の諍いを展開している。

堺屋の場合は，「イェスゲイのホエルン掠奪に史的確証なし」とする著者の見解から，その部分の記述がない。テムジンの新妻ボルテは一年経っても子をなさなかったが，メルキトに収奪され，奪還されたときには生後二ヶ月ほどの嬰児を抱いていた。テムジンは長い間考えた末，「ボルテの子は殺せない」「ボルテの子は俺の子だ」として，「長男」にジュチ「旅人」と命名する。津本，堺屋共に出生疑惑に関しては全くと言って良いほど拘泥していない。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

Ⅳ　物語化の特質～～オリエンタリズム

1　大岡昇平が挑んだ「蒼き狼論争」

物語とは一定のシークエンス（筋書き）に，動機や原因や状況等を付与して，物語る相手（対象）と目的（ジャンル）を設定して構成されたものと捉える（*15 参照）。本稿で筋書きとみているのは『秘史』であり，歴史とは言わないが，チンギス・ハーンを主人公とする歴史的一代記である。モンゴルの人々にとっては歴史同然とみなされていよう。

この筋書きを原材料として，日本では数々の文学ジャンルの作品を誕生させてきた。その背景や特質を論じるのが本節の目的である。ついては，どうしても思い出す必要のある大論争がある。大岡昇平が昭和 36 年（1961）1 月から『群像』に時評的論説の連載を開始し，その第 1 回が「『蒼き狼』は歴史小説か」であった。これを契機として，大岡と井上の間で，他者も巻き込む応酬が繰り返されたのだった。

それまで，例えば中村光夫などは「朝日新聞」（昭和 35. 6. 20）の文芸時評で，『蒼き狼』の歴史小説としての新生面を積極的に評価していたようだ。長谷川泉編『井上靖研究』（1974）に収録された高橋新太郎「『蒼き狼』論争の意味するもの」から，大岡昇平の主張を高橋が「要約」した文章の，更に要点部分を引用してみたい。

> 成吉思汗の大業は，「氏族連合体を，専制君主制による軍事国家に編成替えしたことによって可能であった。遊牧を掠奪という手取り早い生産様式に代えたこと」で成し遂げられたのであり，井上の発明したような出生の秘密にかかわる「狼の原理」に忠実であったがためとは考えられない。井上はこの原理のために，原本の「元朝秘史」を「改竄」するなど歴史を勝手に「改変」しており，（中略）「歴史小説」といえるかどうか疑問である。［高橋 1961：366］

井上はこれを受けて，『群像』2 月号に反論を載せている。次は同じく高

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

橋の要約である。

> 大岡のいう「狼の原理」の発明こそが自己の創作を支えたものにほかならない。「私が書きたかったのは歴史ではなく小説」であって，大岡の考えはひどく窮屈である。歴史小説はそれが小説である限り，歴史的事実の間に作者の解釈が介入せざるを得ない。[ibid. 367]

大岡の主張と反論はもう一度，次『群像』3月号でなされた。高橋の要約で見る。

> 井上の「改竄」が「弁解の余地なきものである」ことを繰り返し，（中略）「小説家が歴史的人物の『秘密』というようなことを口にする場合は，その成果が真実である，これこそ歴史であると言えなくてはならない」と断じたうえ，井上の明かしてくれた成吉思汗の「秘密」なるものは，歴史とは無関係であって，そこにあるのは「あるコンプレックスを持った男の成功譚であり，（中略）わが子に自分の分身しか見られない感傷的な父親の哀話であり，西域のエキゾティスムであり，いい加減なだけに刺激的な戦争残酷物語」にすぎないことを強調した。[ibid. 370-1]

大岡昇平は日本の戦争文学の頂点に立つといわれる。『俘虜記』に次いで『野火』において戦争の極限性を再現し，屍の肉を前にした精神錯乱的飢餓が，強い倫理観と主知的心理分析で描かれた。おそらく，こうした表現が，大岡の「これこそ歴史である」と言える「真実」なのであろう。

大岡と井上による『蒼き狼』論争を長々と引用したが，その応酬内容が半世紀近く経った今も，全く隔世の感を抱かせないからである。それどころか，問題点は既に大岡によって言い尽くされていたとさえ思われるのである。しかし，今日的観点からも，再度アプローチしてみたい。

2 「既視の場所」

大岡が井上の『蒼き狼』の中に成吉思汗の「秘密」として明かされているのは「あるコンプレックスを持った男の成功譚」であり「わが子に自分

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

の分身しか見られない感傷的な父親の哀話」にすぎないと言う。その言葉の裏を返せば，それらはいわば手あかにまみれたテーマでしかないと言うことであり，チンギス・ハーンという男の世界を，E. サイードの言葉を借りるなら，「既視＜デジャ＝ヴュー＞の場所」［サイード 1993：413］にしていると言うことではないだろうか。

井上が『蒼き狼』を構想するにいたる直接の契機は，那珂通世の『成吉思汗実録』を読み，冒頭の「上天の命によりて生まれたる蒼き狼ありき。云々」の一文からの啓示によって，「蒼き狼」なるイメージをふくらませたようであり，「一番書きたいと思ったことは，成吉思汗のあの底知れぬほどの大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密」だと井上自身が脱稿直後に述べているという［高橋 1961：363-4］。しかしながら，征服の筋書きはアジアの大陸を舞台としたものであっても，肝心の「征服欲」の「秘密」は，日本的物語の枠の中にあったということになる。

三浦雅士はその名も『出生の秘密』（2005）と題する大著で，「漱石研究の新解釈」と帯にうたっていはいるが，実際は丸谷才一に始まり中島敦，芥川龍之介などの作品とその生い立ちの関係に踏み込み，ヘーゲル，ルソー，フロイト等の思想家の言葉に拠って奔放な分析を展開している。この書自体が，日本の文学，あるいは文学者の中において出生秘密が重大な鍵を握ってきていることの証左と言えるかもしれない。前出の文化人類学者小長谷も，このテーマを日本の独特な文化的特質とみなし，モンゴルでは通用しないことを強調している[*19]。

3　オリエンタリズム[*20]的特質

プッチーニのオペラ『蝶々夫人』（1904）は，先行作品二作（1898 年ロングの小説と，1900 年のベラスコの芝居）を経て創られ，更に 1998 年にはレーヴェン作『バタフライ』が誕生した。東洋女性のイメージが，「舞台初演から 84 年後に発表されたこの小説の中で，いかなる方向に尖鋭化され定型化されたかを読み取ることができる」［小川 2007：148］とし，

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

それが小川の『オリエンタリズムとジェンダー～蝶々夫人の系譜』の主調となっている。蝶々夫人を通して描かれた女性像は，実は，近代西洋が本来内に宿しているもの（「非合理性」「混沌」「エロティシズム」）を象徴し，憧憬する「永久に女性的なもの」の具現化に他ならないという［ibid. 142-3］。

異文化摂取は，そもそもその対象が理解の及ばぬ全くかけ離れた性格のものとみなされるなら，文字通り接点はありえない。摂取の主体側に，その周縁において対象となる客体と重なり合う部分が潜在的にでもあって，初めて解釈と取り込みへ進むはずである。その重なりが主体者にとってどのようなものであったのか，摂取され，再構築され，もはや客体ではなく，新たな主体の一部として浮上してくる。

堺屋太一の場合は，『世界を創った男　チンギス・ハン』に登場し，画期的な通貨政策を「ハン」に指南する情報通の若者は，関西弁の商人言葉を喋るウイグル人旅芸人の若者である。「ハン」の世界制覇も堺屋ワールドの常套的経済視界の中に歪曲化されているとみることもできる。しかし，創作あるいは物語化とは，そうすることによってしか実現しないのではないだろうか。客体の主体への取り込みと同化は，物語する際の不可避的性格であると思われるのである。

テクストとなって存在している「オリエントは物言わぬ存在」［サイード 1993：上 224］である。この「オリエント」を『元朝秘史』と読み替えてみよう。（テクストは）「知識であるだけではなく，そのテクストが叙述しているかに見える当の現実をさえも創造することができる（後略）。やがて，こうした知識と現実とは，一種の伝統を，つまりミシェル・フーコーが言説（ディスクール）と呼ぶところのものを生み出すことになる。そして，個々の作家の独創性などではなく，実はそうした言説の実体的存在（マテリアル・プレゼンス），ないしはその重み（ウェイト）こそが，言説の内側から生み出されるテクストの内容を決定する本体なのである。」［ibid. 上 223-4］まさに井上，森村らが『秘史』に対してなしてきたことの再認識へと繋がる。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

ここで今一度，フーコーの「言説」を，「物語」と読み替えてみることが可能なのではないか。すると，「物語」の原理が見えてくるだけでなく，サイードに向けられた批判も理解できる。つまり，「サイードがオリエンタリズの基盤として指摘」しているのは，「『心象地理』的な他者理解や知識と権力の結びつきなど」であるが，「真理が表象にすぎず，純粋に客観的な知などありえないとする（サイードを批判する者の）立場もまた，全ての学問分野に対して主張しうるもの」［杉田 1993：356］だということである（括弧内は鈴木の補足）。言説が実体であり，本体である。同様に，物語が実体なのだ。もともと，純粋に客観的なものなどないのだから，ということである。

おわりに～～満州，モンゴル，チンギス・ハーン

1　背景としてある日本の大陸進出

那珂通世の『成吉思汗実録』が世に出たのは明治 40 年（1907）である。日露戦争の 2 年後であり，更に 2 年後には韓国併合があった。日本が大陸に向けて着実に侵略の触手を伸ばして行き始めた時期である。四半世紀後には植民地「満洲国」が誕生する。そこには国策としての建築活動があり，メディア（『満洲日報』『満洲映画協会』）が生まれ，日露戦争の勝利でロシアから東清鉄道の諸利権を得て以来始まっていた大陸観光のメッカとして，「満州旅行にも本格的なブーム」［高 2006（04）：129］が訪れた。満州は文化の先進地だった。文学は気鋭の小説家や詩人を育て（参考［和田 2006（04）］），建国のロマンティシズムや大陸の自然と空気がエキゾティックなイメージを醸成していたのである。

こうした中で，多くの日本人が「モンゴル」に出会ったと考えられるが，余り良いかたちにおいてではなかった。三井・住友などの民間資金で国策機関として 1934 年に設立された財団法人善隣協会が出した啓蒙用小冊子『蒙古とはどんな処か』では，例えば「北は蘇国の為に蹂躙せられ，南は

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

漢人の為に同化去勢せられて，あたら成吉思汗の後裔も七百年の悲惨なる歴史を残して，壊滅の外なきに至るは必定」と断言している。その上で，協会の使命として「心からの良友となって，其の蹶起覚醒を促す唯一の具体的運動機関」と自己規定しているのだ［原山 2005：372］。これは，日本軍参与の下で，蒙古連盟自治政府が組織され（1937），チンギス・ハーン祭祀をおこない，のちに独自のチンギス・ハーン廟を王爺廟（おおやびょう）（現内モンゴルのウラーン・ホト）に建設した［楊 2004：301-3］，その建前としての背景の一端と言えよう。

日本が西欧の先進列強に伍して大陸への進出制覇を欲望した結果は，良きにしろ悪しきにしろ，民間人にとっても大陸を身近なものにし，文化活動の面でも新たな素材と動機をもたらしたことは否めない。「満洲」とそれに関わる言説は，歴史の痛みを伴いつつも，独特なニュアンスを以て日本人の心に食い込んでいるようだ。近年，書店の一コーナーを独占するかのごとき「満洲」関連本は，単に日本が経てきた大戦をもう一度教訓として見直そうと言うリベラルな思いの反映ばかりではないだろう。そのまなざしは，かつての誤認・錯誤の上塗りとなる可能性を秘めている。

今沢訳『オリエンタリズム』所収の杉田英明著「『オリエンタリズム』と私たち」にみえる次のような指摘を，熟慮する必要があろう。

> 一方，いま中東に即して考えた「日本のオリエンタリズム」の問題は，日本と東アジア（とくに中国・朝鮮）との歴史的関係を辿るときにも同様に現れてくる。（中略）例えば日本の東洋史学（シナ学）の性格や，大衆レヴェルでの中国観・朝鮮観，また現実の大陸侵略の歴史など，確かにヨーロッパのオリエンタリズムと重ね合わせて考えることのできる部分は少なくない。こうして，『オリエンタリズム』の問題提起を，私たちにとっていっそう切実な，身近な問題としてとらえ直すことも必要なのである。［杉田 1993：366-7］

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

2　日本人がチンギス・ハーンを物語る意味

ここで振り出しに戻り，日本人がチンギス・ハーンを物語ることの，文化としての意味，あるいは問題点を考えてみたい。

日本は江戸の初期から偽書を次々に作成して，日本と大陸の王朝とのつながりを創造してきた［宮脇 2002：217］。これが本論の「はじめに」で述べた＜義経＝ジンギス汗説＞と繋がった。明治に入り，植民地争奪に遅れじとばかり，遼東半島に足場を築き，大陸に植民地「満洲国」を得るに至ったが，そこは広大な大陸の玄関先でしかない。その奥座敷には，文字通り幻想的な中央アジアの草原や砂漠や山々がヨーロッパまでも広がる。そこにたった一人の男が，800 余年も前の半世紀間に大帝国を築いた。なぜそのようなことが可能であったのか。日本人にとっては羨望を伴った謎であったはずだ

この問が，解き明かされることなく今に引き継がれ，新たな解釈と手法による創作，つまり物語を挑発してきたと言えよう。しかし，その解釈＝まなざしは，小説だ，文学だと言う理由で，諸批判の対象から除外されるものだろうか。「歴史小説」とカテゴライズされうるなら，そこには「歴史」の物語と小説の物語がある。大岡昇平が『蒼き狼』を，「秘密」の解明において「歴史の真実」が明かされていないから，「歴史小説」に非ずと断罪した頃は，確かに「歴史」も「真実」も実態として輝いていた幸福な時代であったかも知れない。だからといって，今日，その言説を冷笑して済ますことが出来るとは思えない。

他国でも創作や伝承の対象としてもてはやされた歴史上の人物は，一人チンギス・ハーンだけでないことは事実である。アレキサンダー大王はイスラム諸国においても，イスカンダールとよばれて，夥しい数の物語を生み出したことはその典型と言えよう。ローマ皇帝達はハリウッド映画のヒーローとなった。特に問題を生じていないではないかと言えるかも知れない。しかし，聖書やコーランの登場人物の扱いは，時には宗教上の摩擦や国際問題となった。同様に，チンギス・ハーンは現在のモンゴル国とモンゴル

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

民族の神的象徴なのである。

日本人はなぜ他民族の建国の英雄を，まるで自らもその民族であるかのように，物語ることができたのだろうか。「三国志」の劉備玄徳や関羽，張飛を語るのと同じレヴェルと捉えて良いのであろうか。全く違うと言えそうだが，必ずしもそうではなかろう。物語にすると言うことは，既に見てきたように，「物言わぬ」筋書きという客体に対して，物語る主体者が理由や意味を（勝手に）付与して構成するものである。その描写・言説は主体者の既知のことであり，既視のシーンでしかありえない。つまり，物語は「オリエンタリズム」に陥ることを避けられないのではなかろうか。そこには，度合こそ違え，強者と弱者の関係が生じる。物語は対象を自己に取り込んでしまうことだから。ときにはそれは，異郷に自らの文化の延長たる植民地を築くに似ている。

サイードの「オリエンタリズム」の理論的あるいは検証上の欠陥は多々あるかも知れないが，より生産的に，前向きな適用が求められていると言えよう。

（2008年1月15日）

注

＊1　鈴木道子「蘇るチンギス・ハーン」藤井知昭（編）*Chubu Institute for Advanced Studies 34*（「アジアにおける文化クラスターⅢ～時代認識の変容～」）中部高等学術研究所，2005。

＊2　小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』冨山房 1924 がもっともよく知られている。それ以前には，シーボルトによる『日本』（1832～）での言及が初期のものとされる［松山 1989：32］。しかし，この小矢部説には元本があること，それは，イギリス留学先で日本人が出した偽論文を補強した内容のものであることなどの背景が［宮脇 2002：218］に詳しい。

＊3　中華人民共和国政府自ら，オルドスに建設したチンギス・ハーン陵墓で，1962年にチンギス誕生八百年祭を行おうとして集まった関係者は，その後冷戦下にて，ソ連により失脚もしくは殺害された。2002年の八百四十年祭記念行事は，あらためて中国政府主導で行われた。「中華民族の英雄として本格的に生まれ変わろうとしている。」（ボルジギン・ブレンサイン「チンギス・ハン誰の英雄」朝日新聞 2002. 11. 29）。しかし，「異民族の侵略者とさ

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

れていたチンギス・ハーン」が「中華民族の英雄」として正式に祭り上げられたのは，これよりもかなり前のことであり，中国共産党がチンギス・ハーン記念堂を設置し，毛沢東と蒋介石（国民政府）両者が参拝した1942年のことである［楊2004：303］。

＊4　林羅山/鵞峯（纂）『続本朝通鑑』1670（義経逃亡説），加藤謙斎『鎌倉実記』1717（義経大陸渡り説），森長見『国学忘貝』1783（義経＝清朝祖先説）など関連資料は少なくない。

＊5　菊池勇夫「義経『蝦夷征伐』物語の誕生と機能」『史苑』42・1〜2（オキクルミ＝義経説を紹介）。阿部敏夫『北海道義経伝説序説』響文社2002に詳しい。

＊6　例えば中国国際放送局日本語放送（北京放送）2005. 1. 3付けホームページに明言されていた。

＊7　河原崎長十郎の「成吉思汗」と，中村翫右衛門の「ジャムカ」との呼吸がぴったりしたことがこの芝居に新鮮な感銘を与えた，と尾崎は述懐している。［尾崎1964：176］

＊8　1978年，日中国交が回復，日中平和友好条約調印を機に翌年に日中文化交流協定が調印され，映画制作に中国の協力を得ることが実現した。

＊9　モンゴル側の「建国800年記念委員会」やモンゴル映画連盟などの協力の下，制作費30億円が投じられ，2万7000人のモンゴル人エキストラが動員された（AERA 2007. 3. 5）。スクリーンには「協力　井上靖」と大きく出る。

＊10　歴史も「物語」であると言う見解がある。＊15参照。

＊11　妻とする女の掠奪は，妻の氏族集団を見方に取り込むのが主目的であり，森村作品やその映画で言っているような戦利品とは全く異なる性格がある［小長谷2008：in print］。

＊12　「グローバル社会」とする根拠と思われるのは，モンゴル帝国の場合，「強い統制力と完璧な指揮命令系統を持った近世的絶対王制」の下，堺屋が作中で傾注している「情報集中体制と不換紙幣を国際基軸通貨としたこと」である。［堺屋2007：Ⅰ-242，250］

＊13　参考に代表的資料をひとつあげておく。オットー・ランク（野田倬訳）『英雄誕生の神話』文藝春秋1960（昭和35），p. 327。

＊14　長年モンゴルでフィールドワークに携わってきた文化人類学者の小長谷有紀は，現地では受け入れがたい，日本人によるチンギス・ハーンを主題とした文学作品の問題点を論じ［小長谷2007：4-7］，2007年に映画化された作品が現地で顰蹙を買っている現状を報告している。最も問題にされているのは，「出生の秘密」にこだわる姿勢であり，これによってモンゴル帝国建国

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

の英雄はすっかり矮小化されてしまった［小長谷 2008：in print］。

＊15　ここで「物語」は，次のような意味で用られている。一連の出来事の筋道シークエンスをストーリー（又はプロット）とよび，それに原因や動機を与え，構造化された物語/ナラティヴに構築・組織化することを語り/ナレーションとする。ナラティヴには二つの要素が必要とされる。視点や様式をもたらす語り手と，ナレーションの読者や観客である。従って，同じ出来事を原材料とするナラティヴであっても，語り手と受け手によって，目的も参加者もレトリックなどもすべて異なる。極端に言えば，すべての説明がナラティヴ，すなわち虚構とみなされうるが，しかし，例えば経済，政治，歴史と言った言説と，あるいは文学，演劇などの言説は，それぞれ区別が可能だ。参考［ブルッカー 2003：245-7］

＊16　小林高四郎はここにモンゴル民族の由来を語る「二つの始祖説話」があるとして，次のように述べている。「第一の説話（狼鹿交配説話）は十世紀ごろ，モンゴル民族が東方からオノン，ケルレンの二つの河の上流に移って，ここで接触したトルコ系の高車，突厥（トックツ）等の民族からえたもので，第二のそれは，扶余とか，高句麗の民族がもつ感生説話と同じ系統のもので，これは，モンゴルがまだ東方にいた頃からの固有のもので，（中略）民族が東から西へ移動したという歴史的事実を反映するものでもある。」［小林 1960：19-20］また，『元史』に書かれたチンギス・ハーン伝では，その祖先はアラン・ゴアに神人が降臨した説話で示されており，モンゴル高原のその他の遊牧騎馬諸民族の始祖伝説にも類型がみられる［宮脇 2002：52］。

＊17　ラシードウッディーンの『集史』の記録に拠れば，これとは全く違っている。メルキトの敵手に落ちたとき，ボルテは既に妊娠していて（つまり，テムヂンの子である），ケレイト族のトオリル合罕に貢物として送られたが，トオリルはテムヂンの亡き父イェスゲイとの好誼を重んじて犯すこともなく，実の娘同様に扱い，後に要請に応じてテムヂンに返された。帰途に突然出産したため「ジョチ」と名付けられた［村上 1976：193］。ジョチという名に関しては様々な言語的考証があり，意味は「客，仲介者，通辞」。系図を見ても分かるが，「当時のモンゴル人によく見られた人名」［村上 1976：192］。

＊18　作品構成自体は大きく異なる。井上の『蒼き狼』が成吉思汗の死と埋葬でもって終結しているのに対し，森村の作品はそのメインタイトルである『地果て海尽きるまで』が示すように，成吉思汗の死後，クビライがモンゴル水軍を結成して南宋を落とし，海の向こうの日本遠征（元寇）に二度失敗，三度目を果たさぬまま，1294 年に没するところまでが描かれている。この部分が全体のほぼ四分の一を占める。テムジンの誕生を 1162 年とし，モンゴルの歴史 130 年余りを扱ったことになる。

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

＊19　モリス・ロッサビ『現代モンゴル』（2007）の監訳者として，その序文「モンゴルの民主化十八年と，日本」の中で，「チンギス・ハーンをめぐる日本的神話」と見出しを付け，「小説『蒼き狼』の場合は，『出生の秘密』をある種の劣等感として措定した」と指摘し，「出自に関して劣等感を持ち，それを克服して活躍するという男の生き方は，少なくとも現代モンゴル人の理解するところのチンギス・ハーンとはまったく異なる英雄像である。その意味では，異文化『誤解』であり，『勝手』理解である。日本人好みに作りかえられて信じられてきたという意味で，それはもはや日本的神話であると言ってもよいかもしれない」と締めくくっている。［小長谷 2007：6-7］

＊20　E. W. Said の『オリエンタリズム』のことであり，周知の内容と思われるが，翻訳者の定義を示しておく。「西洋の東洋（オリエント）に対する志向の様式」を示す語として，また「西洋の東洋に対する支配の様式」を示す語として用いている［今沢 1993：下 389］。

引用参照文献一覧

井上靖　1960（昭和 35）『蒼き狼』文藝春秋
1973（昭和 48）「自作解題」『蒼き狼・風濤＜井上靖小説全集 16＞』新潮社
今沢紀子　1993「訳者あとがき」『オリエンタリズム』下（E. W. サイード著，板垣雄三・杉田英明監修）（平凡社ライブラリー）平凡社
小川さくえ　2007『オリエンタリズムとジェンダー「蝶々夫人」の系譜』法政大学出版
尾崎士郎　1966（1940/ 昭和 15）「成吉思汗」『尾崎士郎全集　第十巻』講談社
1964（昭和 41）『小説四十六年』講談社
小澤重男　1994『元朝秘史』（新書）岩波書店
（訳）1997『元朝秘史』（上・下）（文庫）岩波書店
小谷部全一郎　1924（大正 13）『成吉思汗ハ源義経也』冨山房
川口喬一/岡本靖正（編）1998「サブプロット」『最新文学批評用語辞典』研究社
高　媛　2006（2004）「『観光楽土』としての満洲」『満洲とは何だったのか』（藤原書店編集）藤原書店
小長谷有紀　2007「モンゴルの民主化十八年と日本」『現代モンゴル』（モリス・ロッサビ著，小長谷有紀監訳）（明石ライブラリー）明石書店
2008 in print「日本映画『蒼き狼』に対するモンゴルでの評判」ニューズレター＜文化の往還＞人間文化研究機構
小林高四郎（訳注）1941（昭和 16）『蒙古の秘史　蒙古民族の古典』生活社
（著）　1960（昭和 35）『ジンギスカン』（新書）岩波書店

NII-Electronic Library Service

Chukyo University

サイード，E. W.　1993（今沢紀子訳，板垣雄三・杉田英明監修）『オリエンタリズム』上・下（平凡社ライブラリー）平凡社

堺屋太一　2007「全体解説」『世界を創った男　チンギス・ハン』Ⅰ，日本経済新聞出版

白石典之　2006『チンギス・カン』（新書）中央公論新社

高木彬光　2005『成吉思汗の秘密』新装版（文庫）光文社

高橋新太郎　1974（昭和49）「『蒼き狼』論争の意味するもの」『井上靖研究』（長谷川泉編）南窓社

津村　陽　2006『草原の覇王　チンギス・ハーン』PHP研究所

原山　煌　2005「19世紀末期における日本人のモンゴル観」『ユーラシア草原からのメッセージ』（松原・小長谷・楊　編）平凡社

ブルッカー，ピーター（有元・本橋訳）2003『文化理論用語集　カルチュラル・スタディーズ＋』新曜社（1999, *Cultural Theori A Glossary*）

松山　巖　1989「英雄生存伝説と日本起源論異説」『ユリイカ』1989.9

三浦雅士　2005『出生の秘密』講談社

宮脇淳子　2002『モンゴルの歴史　遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房

村上正二（訳注）1970（昭和45）『モンゴル秘史1 チンギス・カン物語』（東洋文庫）平凡社，1972『モンゴル秘史2』，1976『モンゴル秘史3』

楊　海英　2004『チンギス・ハーン祭祀』風響社

ランク，オットー（野田倬訳）1986『英雄誕生の神話』人文書院（1922, 'Der Mythus von der Geburt des Helden' 初出は1909，フロイト編『応用心理学論叢』5号）

和田博文　2006（2004）「大連のアヴァンギャルドと北川冬彦」『満洲とは何だったのか』（藤原書店編集）藤原書店

NII-Electronic Library Service